

朱泥菊型急須

— 初代 杉江寿門 作 (明治10年代) —



故岩橋栄吉コレクション

常滑で急須の制作が始まるのは、今から約200年前の江戸時代後期の頃です。最初は壺や甕と同じようにヒモ造りでしたが、急須や徳利などの生産がさかんになるとロクロでひいた作品もつくられるようになります。

初代杉江寿門の作品「朱泥菊型急須」はヒモ作りでもロクロ作りでもなく、「パンパン製法」と呼ばれる中国宜興省の伝統的な急須製作技法で作られています。パンパン製法は明治11年に中国の文人といわれる金士恒が、常滑の急須の名工数人に伝承した技法です。

造り方は板状の粘土（タタラ）のパーツをつなぎ合わせて、木の板で「パンパン」と叩きながら形を整形していくことからこの名称が付けられたと考えられます。

その当時、中国で作られた急須は大変希少で、その作り方も知られていなかったことから、近代土管の父と呼ばれる鯉江方寿がパンパン製法を熟知していた金士恒を常滑に招いて、初代寿門をはじめ四代伊奈長三、三代赤井陶然らに伝えました。

菊は日本人の好きな花の一つで、花言葉は「高貴」という意味があります。明治時代の上流階級で愛された常滑の煎茶器の中でも特に素晴らしい作品です。

初代杉江寿門作 「朱泥菊型急須」を詳しく解説



写真1 把手の裏



写真2 茶漉部分



写真3 上から



写真4 裏側



写真 5 急須をひっくり返す

- ①把手の裏に「寿門」の角印があります。
- ②口縁は円形ではないので、蓋はグルグルとまわりません。
- ③茶漉の穴は外から胴に向かって3つの穴があげられています。
- ④花卉（花びら）が16枚あるので、家紋でいうと「十六菊」です。
- ⑤空気の穴は蓋の摘み部分にあります。
- ⑥急須をひっくり返すと、注ぎ口、口縁、把手の上端部がピタッと揃います。